一

(一)
(1) 鍵
(2) 跡形
(3) 遇
(4) 参照

(二) 普遍的手段である貨幣が個々の特定の目的を自らに従わせること。

(三) 金銭的報酬は成績向上という目的に仕える手段としてインセンティヴとなるという見方。

(四) 単純で退屈な課題では、金銭的報酬が目的となってその解決への魅力を高めるが、認知的なひらめきや創造性が伴う課題では、報酬が上位の目的となって、課題解決自体の魅力を低減させてしまう。

(五) 貨幣という形式への欲望が優位となる資本主義の下では市場的規範が他の規範を包摂し、有意味な選択ができるにもかかわらず、その自由が放棄されてしまうこと。

二

(一)
(1) 悲しみや後悔を表情にあらわして
(2) 見過ごしにできないほどかわいそう
(3) 生き生きと思い起こされる

(二) 人づきあいが苦手で孤独だった幼い自分にとって、水樹がいかに大切な存在であったかということ。

(三) 世間や学生たちへの引け目から水樹に会う勇気が出なかった信也の気持ちが自分にはわかったから。

(四) 郷里にいる兄にいますぐに会いに行ってほしいと強く願う気持ち。

(五) 苦難に満ちた人生を経て、今自分らしく生きえている悠人の姿に、たくなった正浩の言葉が重なり、ゆっくり焦らず努力を続ければ、きっとそれがしあわせにつながるのだとの励ましを感じている。

© 河合塾　2023年

三

(一) (1) 言葉だけが尊大になっていってしまった

(2) まったくひどく未熟だったこと

(二) 自然と一体になって、自分も敵もなく、広く豊かな無我の境地。

(三) 私が禅意を得たことを知らないような人がどう言ったとしてもかまわないが、この私は禅意を得ているのに、どうしてあなたは私が禅意を得られるはずがないなどと言うのか。

(四) 人に勝ちたいと思う心、弓を放つ頃合いを思い過ごしにできない病、弓の弦で耳を打つ怖さを払拭できない不安等を捨てられないこと。

(五) 抜きん出てすぐれた者は自分がその境地に達していると思わないが、あなたはそこに達していると自負しているだけだということ。

四

(一) (1) けだし　(2) およそ

(二) (ア) あやうし(ふ)といえども(う)ついにおそれず(こ)

(イ) すなわち(は)かならずこのこころとともにす(お)

(三) 当人が充足できるだけ追求すれば、子孫に残す物はもともと少ないのだ。

(四) 自身に必要な分を超え、家族や子孫にまで財産を残すには不足を感じること。

(五) 家族や子孫に過剰な財産を残すべきではないという教えと捉え、節度を持って充足する心を伝えることに生かすべきだと考えている。

© 河合塾　2023 年